

# 調査の概要

## 調査の方法

首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉)の60地点(58市区町村)より、住民基本台帳を用いて、60～69歳(2014年10月末現在)の男女1,500人を抽出しました(層化二段無作為抽出法)。調査は、2014年11～12月に郵送法で実施し、有効回答者数は813人、回収率は54.2%でした。

## 回答者(813人)の基本情報

性別	男性:45% 女性:55%
年齢	60～64歳:47% 65～69歳:53% (平均64.6歳)
同居家族	ひとり暮らし:12% 配偶者:77% 息子:23% 娘:23% 子の配偶者:5% 孫:6% 自分の親:6% 配偶者の親:3% その他:4%
子ども・孫	子どもあり:86% 孫あり:54%
住居形態	一戸建て:71% 分譲マンション:16% 賃貸:11% その他:1%
現住所での居住年数	平均29.8年
暮らし向き	毎月のやりくりで苦勞(非常に、やや):42%
健康状態	健康(とても健康、まあ健康な方):75%
就労状況	現在働いている:51% フルタイム:25% 短時間:19% 不定期:8%

## 研究組織

[東京都健康長寿医療センター 研究所]

[実践女子大学人間社会学部]

小林江里香(研究代表)

深谷 太郎

原田 謙

村山 陽

高橋 知也

村山 幸子

藤原 佳典

## 研究助成

本調査の実施にあたり、科学研究費助成事業(JSPS科研費25590165)の助成を受けました。

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています

2015年6月発行

「世代間関係の意識と実態に関する調査」  
報告書  
—首都圏60代シニアの調査から—

編集・発行/ 地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター  
**東京都健康長寿医療センター 研究所**  
社会参加と地域保健研究チーム  
〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2 TEL. 03-3964-3241

デザイン・印刷/ (株)ストリームス  
〒112-0014 東京都文京区関口1-23-6 プラザ江戸川橋310  
TEL. 03-5227-5561

# 世代間関係の意識と 実態に関する調査

## 報告書

— 首都圏60代シニアの調査から —



2015年6月



東京都健康長寿医療センター 研究所

社会参加と地域保健研究チーム

---

## 「世代間関係の意識と実態に関する調査」報告書 － 首都圏60代シニアの調査から －

---

### はじめに

少子高齢化が急速に進む中、多世代の人々が助け合いながら課題の解決にとりくむことが、これまで以上に大切になっています。

「世代間関係の意識と実態に関する調査」は、首都圏にお住まいの60～69歳(2014年10月末現在)の方を対象に、2014年11月から12月にかけて実施されました。ご回答くださいました800人を超える皆様には、心より感謝申し上げます。

さて、この調査が対象とした60代の方々は、仕事や子育てで多忙なより若い世代と、健康に不安を抱えるより高齢の世代の間にあり、さまざまな役割が期待されている世代です。また、仕事についても、調査対象者の約半数は現役で働いており、若い世代と同じ職場で働く方も少なくありません。

本冊子では、様々な場(家庭・地域・職域)における、若い世代との交流や支援の状況、世代間関係についてのご意見などについての調査結果をご報告させていただきました。今後も得られた貴重なデータの分析を進め、より良い世代間関係のあり方について明らかにしてまいりたいと存じます。

本冊子が、異なる世代の人々についての関心を高めたり、交流をみなおしたりする一助となりましたら幸いです。

# 若年世代との交流の機会－親族・地域・職域



## 子どもや10代の若者との交流

この調査に回答された方(60代)の半数には、よく会話をするご家族や親戚の中に、「10歳未満の子どもや10代の若者」がいました(図1の左の円)。

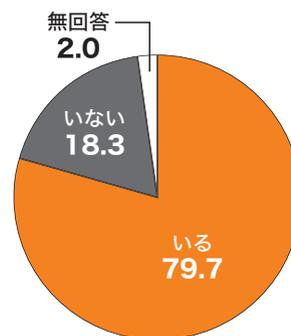
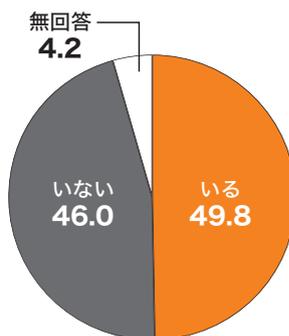
地域(近所づきあい、地域活動・趣味活動)の中で、この年齢層の子ども・若者と会話をする機会については、「よくある」または「ときどきある」人が合わせて3割くらいでした(図2の①)。

一方で、親族内・地域内ともに、この年齢層の子ども・若者と会話をする機会がないという人も、全体の4割を占めていました。

【図1】よく会話をする家族・親戚の中にいるか(%)

【親族】子ども・10代の若者

【親族】20～40代



## 20～40代くらいの人との交流

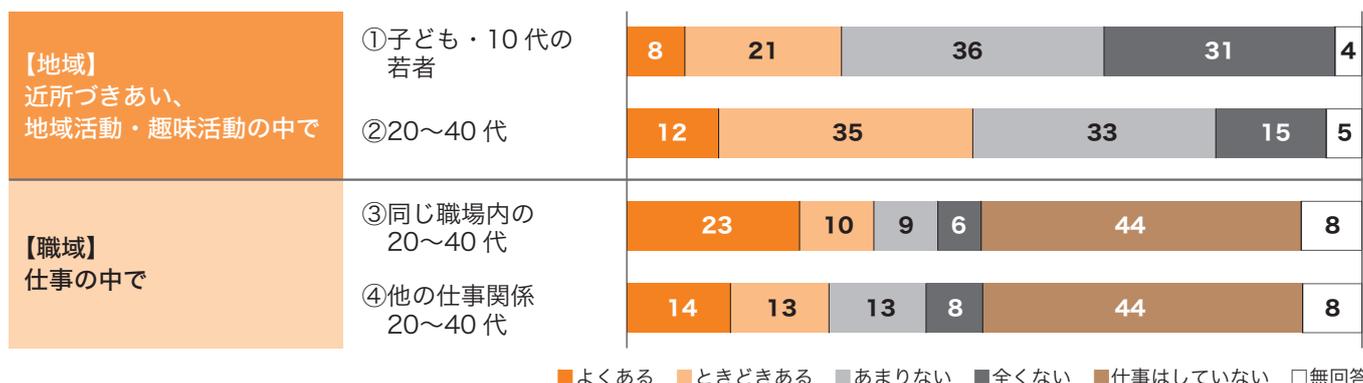
親族内によく会話をする20～40代の相手がいる人は8割(図1の右の円)でした。地域においてこの年齢層の人と会話することがある(よくある、ときどきある)人は5割弱で(図2の②)、子ども・10代の若者に比べると、交流の機会が多いことがわかりました。

また、同じ職場の同僚・部下・上司(図2の③)、同じ職場以外の仕事関係の人(取引先の人、仕事で対応するお客さんなど)④といった、仕事上

(職域)で20～40代の人とつきあいがある人もいます。地域における20～40代との会話の機会は「ときどき」程度が多いのに対し②、職域、特に同じ職場内③では「よくある」の割合が高くなっています。

地域、職域のいずれでも20～40代と会話をする機会がない(あまり、全くない)人は回答者の3割強、親族を合わせてもいない人は約1割でした。

【図2】地域・職域における若年世代との会話の機会(%)



■よくある ■ときどきある ■あまりない ■全くない ■仕事はしていない □無回答

# 職域における若年世代との関係と支援



ここでは、職域での若年世代との交流として、**仕事の中で20～40代との交流がある人**(=前ページの図2の③または④で、会話をする機会が「よく」「ときどき」ある人)について、交流の具体的内容について、さらに詳しく調べました。

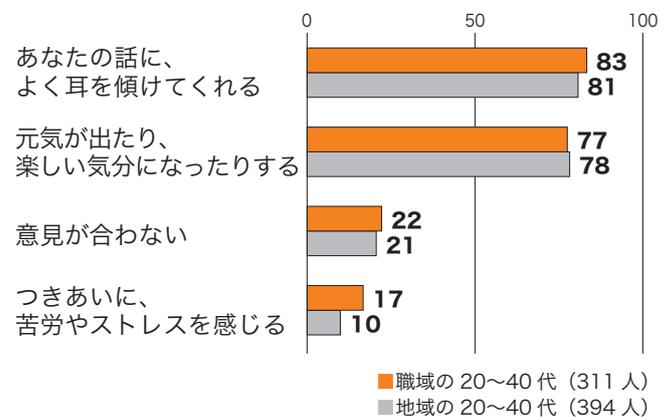
## 若年世代との交流は楽しい？ それともストレス？

職域における20～40代との交流の中で感じていることについて、地域(近所づきあい、地域・趣味活動)における20～40代との交流と比較しながらみてみます。図3の結果が示すように、職域・地域を問わず、約8割の人は「あなたの話によく耳を傾けてくれる」「元気がでたり、楽しい気分になったりする」と感じており、比較的良好な関係をもっているようです。

ただし、これらに比べると割合は低いですが、「意見が合わない」「つきあいに苦労やストレスを感じる」と感じている人もいます。職域での若年世代との交流では、地域における場合と比べて、

苦労やストレスを感じる割合がやや高くなっていました。

【図3】20～40代との交流の中で感じることもある(「よく」「ときどき」ある)割合(%)  
(20～40代と会話をする機会がある人のみ集計)

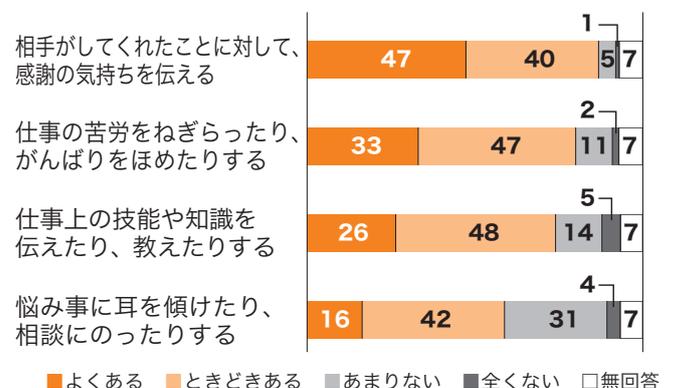


## 若年世代への支援的な行動

職域だけの問題ではありませんが、次世代を担う人々の育成は大きな課題です。調査では、回答者(60代)が、仕事上で交流のある20～40代の人に対しておこなっている支援について質問しました。

図4の通り、4種類の支援的行動のうち、もっともおこなわれていたのは「感謝の気持ちを伝える」で、47%が「よくある」と回答しました。直接的な「支援」ではありませんが、感謝された側は、自分の行動が評価されたことを喜んで仕事への意欲が高まり、結果的に成長を促す手助けとなることもあるでしょう。次に多かった「苦労をねぎらったり、がんばりをほめたりする」についても、同様の効果が期待されます。

【図4】仕事で交流のある20～40代の人に対しておこなっている支援(%)  
(仕事において20～40代と会話をする機会がある311人のみ集計)



# 地域における子どもや子育てへの支援

## 子どもへのあいさつ・声かけが比較的多い

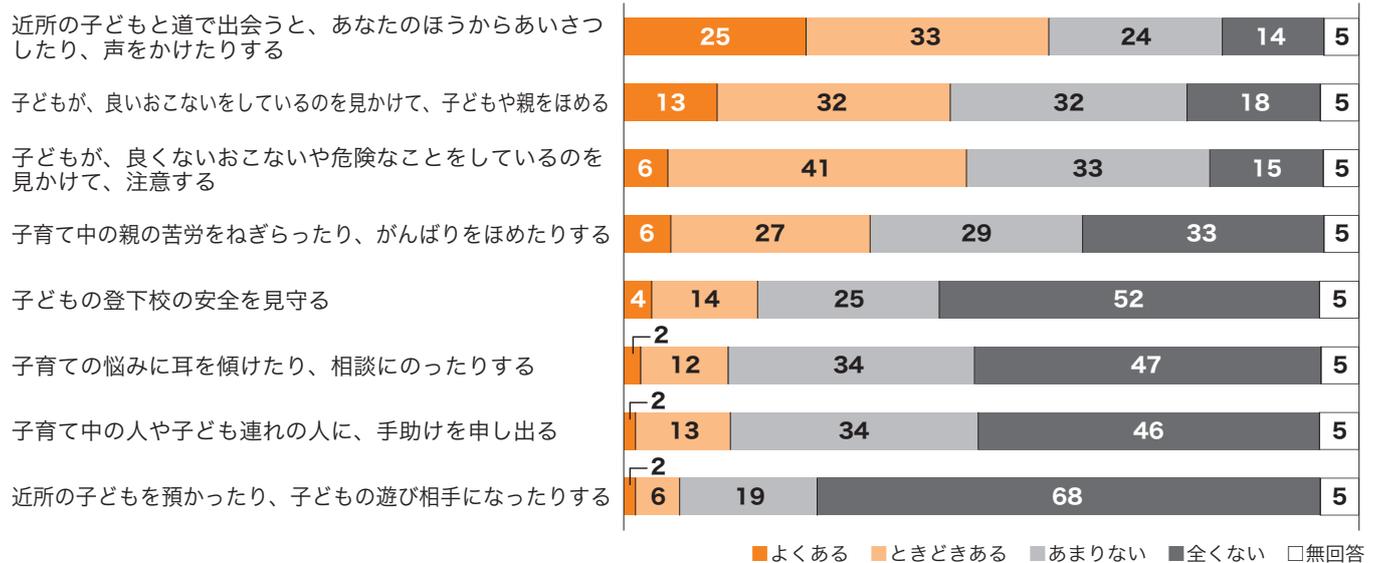
地域における若年世代への支援としては、**子どもや子育て中の人(自身の子や孫は除く)に対しておこなっていること**について、この1年くらいの経験を振り返って回答してもらいました(図5)。この質問は、地域で若年世代と会話する機会がないとした人(1ページの図2①②参照)も含め、全員にたずねています。

「近所の子どもへのあいさつ、声かけ」は「よくある」が25%、「ときどきある」までを含めると

6割近い人がおこなっていました。また、子どもの良いおこないをほめたり、良くないおこないを注意したりすることは、「よくある」は少ないものの、「ときどきある」までを含めた割合で見ると半数近い人がおこなっていました。

一方、子どもの登下校の見守り、子育て中の親の相談にのる、手助けを申し出る、子どもを預かるなどの行動は、「ときどき」を含めても2割未満しかおこなっていませんでした。

【図5】子どもや子育て中の人に対しておこなっている支援(%) (自身の子どもや孫への支援は除く)



## 地域での子育て支援をよくおこなっているのはどのような人が

次に、図5の8項目を合計して「地域の子育て支援」得点(0~24点)を算出し、この得点が高い、つまり、子育て支援をよくおこなっている人の特徴を分析しました。

そもそも、地域において若年世代との交流の機会が少ない人は、支援する機会も少ないのですが、交流の機会が同程度であっても、女性や、現在孫の世話をしている人、ボランティア活動をしている人では、地域の子育て支援得点が高いことがわ

かりました。これらの特徴をもつ人は、子どもや子育てへの関心が高かったり、若い世代とコミュニケーションをする能力が高かったりするのかもしれない。



# 世代間関係についてのご意見



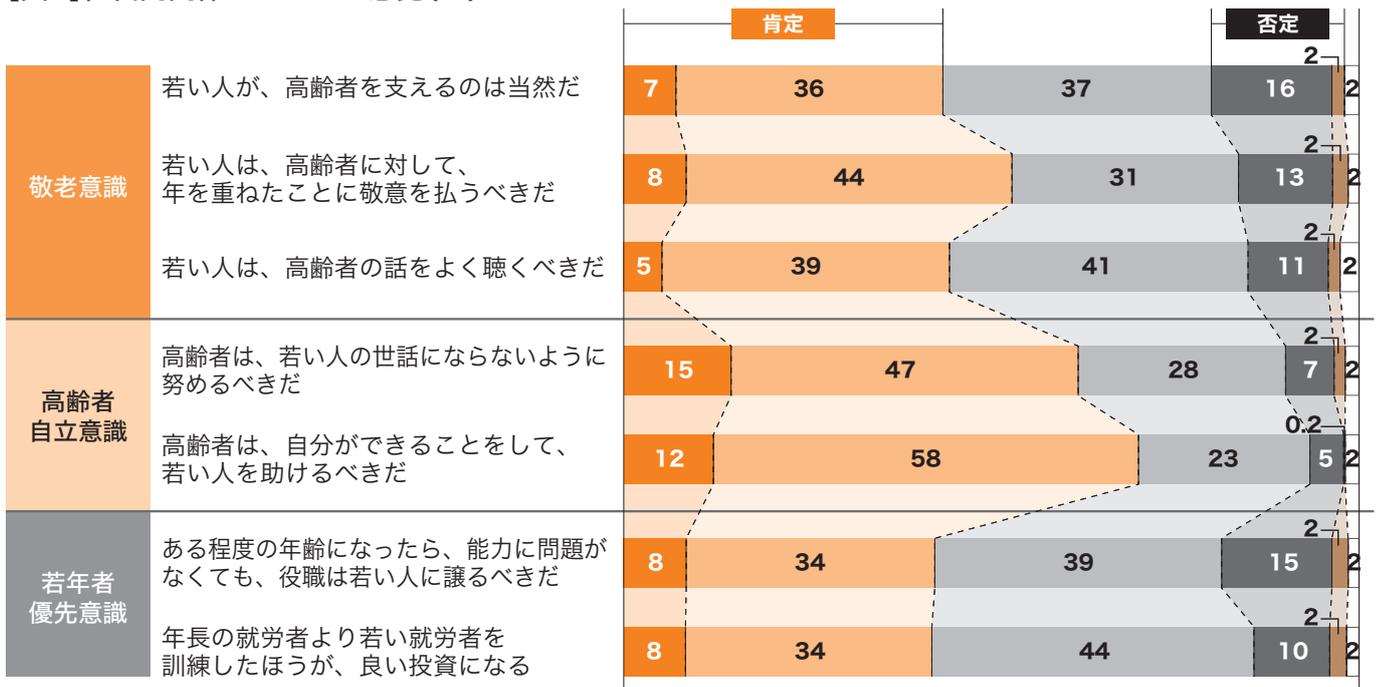
## 敬老意識をもちつつも、高齢者側の努力や責任を重視

図6によると、世代間関係に関して、「若い人が高齢者を支えるのは当然」「年を重ねたことに敬意を払うべき」などの敬老精神を大切にする各意見には、半数ほどの人が肯定し（そう思う、まあそう思う）、否定派は少ないのですが、「どちらともいえない」と判断を保留した人も少なくありませんでした。むしろ、肯定者の割合としては、「若い人の世話にならないよう努めるべき」「自分ができることをして、若い人を助けるべき」といった、

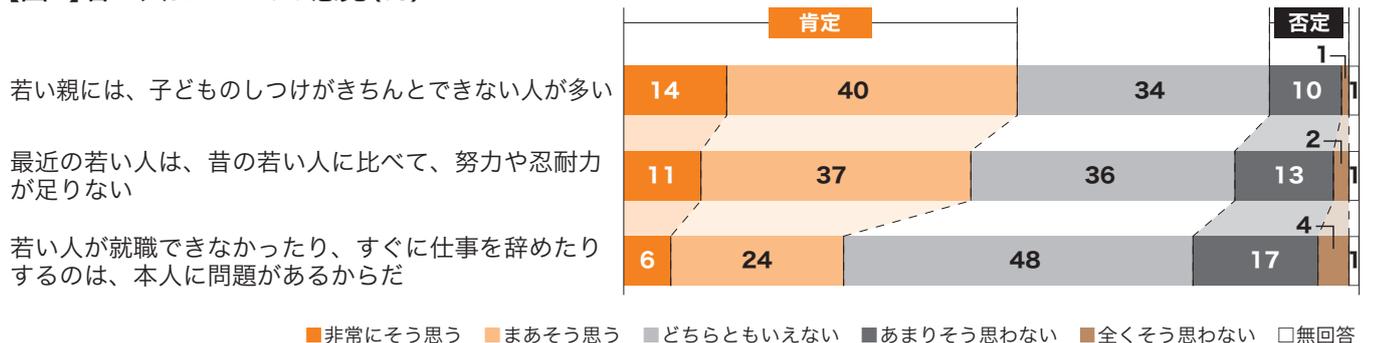
高齢者側の努力や責任を強調する意見のほうが高くなっていました。

調査では、若者への否定的な意見について、回答者がどの程度賛同するかもたずねました（図7）。「子どものしつけがきちんとできない」「努力や忍耐力が足りない」については、半数くらいの人があるように感じていました。現代の若者がそのようなのか、若者はいつの時代も同じ批判を受けているのかは定かではありませんが・・・。

【図6】世代間関係についての意見(%)



【図7】若い人についての意見(%)



■非常にそう思う ■まあそう思う ■どちらともいえない ■あまりそう思わない ■全くそう思わない □無回答

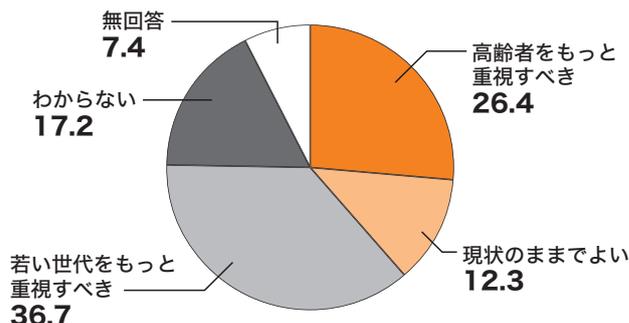
## 政策における若年世代の優先度

「今後、政府の政策全般において、高齢者や若い世代に対する対応をどのようにしていくべきか」について、回答者の考えに近いものを1つだけ選択してもらいました(図8)。

「若い世代をもっと重視すべき」という意見が37%で、選択肢の中ではもっとも高い割合を示しました。しかし、「高齢者をもっと重視すべき」(26%)と「現状のままでよい」(12%)を合わせると同じくらいとなり(39%)、若い世代を高齢者

よりも重視すべきかについては、意見が分かれていることがうかがえます。

【図8】政府の政策において高齢者と若い世代への対応をどうすべきか(%)



## 前の世代から受けた支援は次の世代へ

回答者自身が20~40代くらいのとき、周囲(親族、先輩・上司、先生、近所の人など)には、回答者を支えてくれた年長者(年上の人)がいたでしょうか。

図9の通り、ほとんどの人には、「相談にのってくれた」「苦労をねぎらったり、がんばりをほめてくれた」「困難な状況で助けてくれた」年長者がいました。また、このような支援を多く受けていた人ほど、60代になった現在、仕事上での若い世代への支援(2ページの図4)や、地域の子育て支援(3ページの図5)をよくおこなっていました。

前の世代から受けた恩は、次の世代へとしっか

り返されているようです。このような支援を受けた現在の若い世代が、将来、年長者の立場になったときには、さらに次の世代へと同様の支援をつないでいくことでしょう。

もっとも、年長者から受けたのはうれしい支援だけではありません。回答者の約7割には、小言や文句を言う年長者がいました(図9)。そして、小言や文句を言う年長者がいた人ほど、現在、地域の子育て支援をおこなっていませんでした。将来の世代のためには、若者への小言や文句はほどほどにしておいたほうがよいかもしれませんね。

【図9】20~40代くらいのときに年長者から受けた支援の経験(%)

